

地域から地球環境を考える拠点としての博物館

- 第三世代の博物館の新たな展開をめざして -

滋賀県立琵琶湖博物館 総括学芸員
嘉田由紀子

(Museum Data Number41 1998年6月号 より転載)

1. 1枚のハンカチから

1998年4月下旬のある日、来館者から1通の封書が琵琶湖博物館に届きました。中には、子どもの絵つきの手紙(図1)にお母さんの文が添えられていました。少々長くなりますが、紹介しましょう。

「びわ湖はく物館様 先週、うさぎの絵のハンカチを、送って下さって、ありがとうございました。あのハンカチの黒スミは、学校の写書のあと、手を洗っていて、そのハンカチでふいていたら、まだ手にのこっているスミが、ハンカチに、ついてしまったので、洗っても、洗っても、もちろん、スミなので、スミのあとはのこったままでした。そして、昔のせんたくきの、水をしばるところに、かけたので、おまけにくしゃくしゃ。その大好きなハンカチが、きれいにたたまれて家にもどってきたので、うれしかったです。本当にありがとうございました。

寺田 早百合」

お母さんの文は次のようでした。

「(前略)に度は、私共の長女(小4)の落としたハンカチを、お送り下さいまして、本当にありがとうございました。琵琶湖博物館は長女が3年生の時、遠足

で見学し、「とても楽しかった」と何度も言っておりました。今回、春休み最後の日に、長男といっしょに3人ででかけたのでした。『遠足の時は急いでいたので、あまり遊べなかったディスカバリールーム』でゆっくり時間をとってから、広い館内を、「わあ、すごい！」を連発しながらまわりました。

2Fで、昔の洗濯機を見て、長女はあのハンカチをとり出し「ねえ、こうやってしばったんでしょ」と、手回しのしばり機にかけました。出てきたハンカチはくしゃくしゃで、私もおかしいやらなつかしいやら。

しかし、一番楽しみにしていた『プランクトンが空中に現われるが、手でとろうとしてもとれない』コーナーがなかなか見つかりません。館員のお姉さんに長女が聞きにいくと、お姉さんは、そのコーナーまで案内して下さい、長女はそこでも大喜びでした。

楽しい時間はあっという間に過ぎ、「また来たいね」と言いながら、私達はシャトルポート乗り場へと向かったのです。そして浜大津へ向かう船の中で、ハンカチがないのに気がついたのです。

はじめのうちは長女に「あきらめなさい」と言っていた私でしたが、長女がハンカチを思い出しては悲しんでいるのを見て、お電話させていただきました。あのハンカチを拾って下さった方、保管して下さい、送って下さった方…何人もの方々のおかげで再びハンカチを手にすることができ本当にありがたいことだと思っております。

郵便料金がよくわかりませんでしたので、90円切手を同封させて頂きました。どうぞお納め下さいませ。

このハンカチは、長女にとって、「琵琶湖博物館の思い出」もしみこんだ、いっそう大切なハンカチになりました。(後略) 寺田 郁子

2. 「公害問題」から「生活環境問題」へ

本稿で、編集者からいただいた課題は「地球環境を考える拠点としての琵琶湖博物館の環境展示」というテーマです。そのようなご要望におこたえできるかどうか、いささか不安ではありますが、本稿では、1996年の10月の一般公開の後、1年半を経過した「琵琶湖博物館の今」の一端をご紹介します。博物

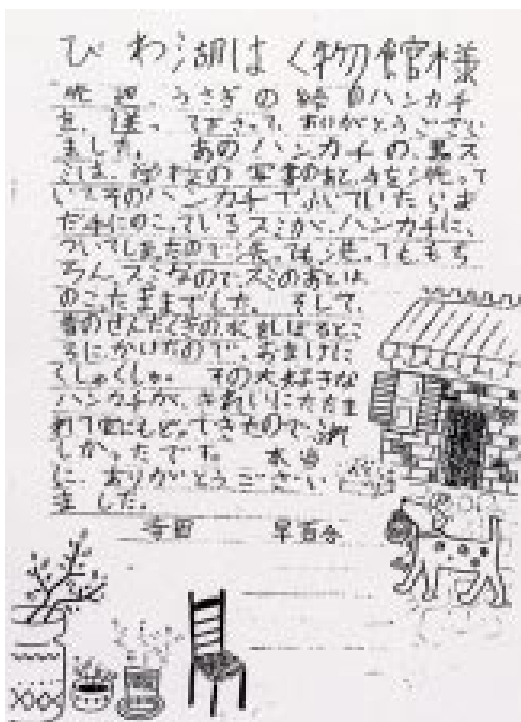


図1 寺田早百合ちゃんの手紙

館の設立のねらい、経過、そして開館後の今、琵琶湖博物館がかかえている課題をご披露させてもらいながら、博物館にご造詣の深い関係者の皆さまからのご意見、ご指導をいただけるきっかけとしたいと思っています。

まず、私たちをとりまく環境問題について、一般状況から考えてみます。

かつて環境問題は、四大公害問題に代表されるように、企業の生産過程から河川や海、大気など公共的な空間に排出された毒性物質を原因とする「反社会的行為」を行う「加害者」が、一般住民の健康や生活に害を与え「被害者」を苦しめるといった構図のものでした。

しかし、高度経済成長をはさんで急速にすすんだ都市化、工業化の中で、「ふつうにくらす」ことが公害問題の原因となる、という構図にかわりました。たとえば、私が朝、トイレで水洗便所を使うことは、めぐりめぐって河川や湖沼の水の汚染問題に加担してしまいます。私が車に乗ることは、排気ガス問題の原因をつくっていることとなります。水洗便所を使うことも、車に乗ることも、「反社会的行為」ではなく、私以外にも、多くの人があたり前の生活様式として行っていることです。水質汚濁の問題や、大気汚染問題など、ふつうにくらすことが環境問題の原因になっていることが、現在の環境問題のひとつの特色です。つまり毒物汚染のような「公害問題」という視点を一歩すすめて、人と自然のかかわりそのものが問題となってきたわけです。そのような意味では、まず私たちの日常生活、生産様式から考えざるを得ない「環境問題」へと今、問題は分散し、そして対処はより困難になっているわけです(1)。

現代の環境問題のもうひとつの特色は、個人の生活、生産活動が地球規模の問題と深くかかっているということです。たとえば、滋賀県では、琵琶湖の富栄養化をふせぐために、衣服の洗濯時には、リンを含む合成洗剤をやめて、有機物を材料とする石鹼にきりかえましょうと呼びかけました。琵琶湖の環境にとっては望ましい提案ですが、石鹼の需要を増やすことが、たとえばヤシ油の需要を増やし、ヤシ油のプランテーションを開発するために熱帯雨林の伐採に手を貸してしまうということも有り得ます。また私たちの食生活をみると、たとえばかつては高くてなかなか口に入らなかったエビ類は、最近はかなり安くなっています。日常生活の中で私たちがエビ類をたくさん消費すればするほど、その生産地である東南アジアの森や林をエビの養殖池に開発することになります。しかもヤシ油のプランテーションも、エビの養殖池の生産も、それでお金をもうけて生活を

なりたさせる地元の人、仲買業者、商社といろいろな人や組織、機構がからんでいます。環境と人間の問題は一筋縄ではいきません。

琵琶湖の環境問題も、かつての毒物汚染のような公害問題という側面が全くないわけではありませんが、重要な問題は、「富栄養化問題」つまり、栄養分が多すぎて、琵琶湖が太りすぎているという問題であり、その原因は、私たちの生活、生産様式が「太った」結果なのです。しかし、私たちは、環境問題を、いわゆる社会問題化された汚染問題という要素だけに狭く考えることは避けました。それは、琵琶湖という存在が、自然的、文化的にも大変価値の深いものであり、そのような価値を再発見する中で、琵琶湖の将来を地域の人、来館者の人たちといっしょに考えたいと思ったからです。

このようなアプローチは、いずれの地域においても通用するテーマであろうと考えます。というのは自然の歴史や、文化や人びとの生活のない地域は存在しないからです。近年、環境と人間のかかわりを考えようというエコミュージアムの動きが活発になっておりますが、琵琶湖博物館の考え方は、エコミュージアムの思想に通じるものであろうと考えています(2)。

3. なぜ「琵琶湖博物館」だったのか？

(1) 琵琶湖博物館前史

琵琶湖博物館の前史は、昭和30年代に始まった琵琶湖の水資源開発への機運が高まった時代にたどる必要があるでしょう。折しも日本全体が高度経済成長にむかって動き始めた頃、下流の大阪や神戸の経済発展に必要な水資源をいかに琵琶湖から供給するか、という課題が、琵琶湖と近畿圏だけでなく、国家的規模で始まりました。さまざまな議論の結果、昭和47年に琵琶湖総合開発が始まります。そして、すでにその時代始まっていた、琵琶湖周辺の都市化、工業化の流れに拍車をかけ、急速な開発が行われます。琵琶湖総合開発が、「総合」と名がつくのは、下流に水を送る見返りに、「遅れていた」地域を開発・整備するという各種の公共事業がセットになっていたからです。しかし、開発政策をすすめる中で、次第に環境破壊の問題がクローズアップされ、地域の行政や住民にも自覚されていきます。その大きなひきがねが、昭和52年に琵琶湖で初めて発生した淡水赤潮(水の華)であり、それを機に、琵琶湖の環境異変が大きな課題となってきます。

しかし当時、関心がもたれていたのは、水質問題だけでした。昭和54年に、県独自で、琵琶湖の富栄養化の原因となる栄養分を流域から流さないようにしよ

うという、いわゆる「富栄養化防止条例（石鹸条例）」が制定されますが、その時代の主な関心は「水質」でした。つまり「近畿の水ガメ」である琵琶湖の「水質が汚染」されているから琵琶湖をどうにかしなければいけないという問題設定です。本来多様な意味のある湖を単に「水ガメ」と表現するのも狭い見方でしたが、当時は行政もマスコミも、「水ガメ」という表現を使っていました。

そのような中で、昭和54年に県の高等学校の理科教育研究会が、県知事あてに「琵琶湖自然史博物館」構想を出し、琵琶湖が数百万年という歴史を秘めた、自然史的にも貴重な湖であることや、周囲の生物の研究や展示が重要であることを強調しました。またここでは、琵琶湖の環境汚染について学びたいという環境教育の視点も入れられました。しかしこの案は具体化しませんでした。また琵琶湖総合開発の開始とともに、琵琶湖周辺の民俗文化財調査も昭和53年から5年間かけて実施され、数千点におよぶ漁具の収集などの結果、「びわ湖民俗博物館構想」も出されました。しかしこの案も具体案にはいたりませんでした。昭和57年には、琵琶湖の環境問題に、自然科学、社会・人文科学など学際的な立場からアプローチする琵琶湖研究所が発足し、ここでも「見えない琵琶湖を見るための「琵琶湖のイメージを結びやすくするための支援施設としての琵琶湖総合博物館」の構想が出されました(3)。

(2) 昭和60年度から開館までの動き

このようなさまざまな動きをうけて、昭和60年度には、県として博物館整備基金の造成に入り、昭和61年度に「博物館の現状、課題、めざすべき方向」についての基礎調査が始まり、昭和62年度に「県立琵琶湖博物館（仮称）基本構想検討委員会」が、また昭和63年度には、基本構想検討委員会小委員会が発足します。そして平成元年3月には、基本構想が公式に県議会の承認を経て策定されます。「委員会では仕事はできない」と言われますが、確かに委員会での案をどう具体化するか、その手続きなしに委員会構想は生かせません。琵琶湖博物館の場合、これらの委員会はある意味で「民主的」に運営され、若いメンバーの意見を小委員会という形で取り入れ、計画の長期的な継続性をはかったという点は評価できることでしょう。

この基本構想冊子はその後の博物館にとっては、いわば「小さなバイブル」のような役割をしました。たとえば、博物館がなぜ必要なのか、という基本的なねらいとして「琵琶湖を知り、琵琶湖に親しむ」「琵琶湖を通じて手を結ぶ」「琵琶湖から広げる」「琵琶湖を考える」という4点があげられていました。そして、「過去の遺物の収容所」としての博物館ではなく、「市

民の知的欲求にこたえ、未来の創造にむかわせる」ための新しい形の博物館であるとまとめられています。その後、平成2年度には「基本計画」、平成3年度には「展示基本設計」「情報システム基本構想」、平成4年度には「建築基本設計・実施設計」「展示実施設計」「情報システム実施設計」が作成されました。展示や建築はもちろんですが、この時代にすでに情報システム設計まで組み込んだことは、その後の館内LANや、情報データベースづくりにとって重要なインフラとなりました。これらの設計、施工計画づくりは、全く白紙のキャンパスにどのような絵を描くべきか、それにはどれくらいの予算、人員、そしてどのような手続きが必要なのか、行政系の事務スタッフと、学芸職員とのまさに2人3脚の「力仕事」でした。この時代、正直言って、行政系の人たちの、組織としてしっかりと目的を達するという卓抜した実力を実感しました。

また平成4年度には、「準備室なれど博物館」の合い言葉のもと、県内各地での自然観察会も始まり、平成5年度には、タンポポや水環境カルテなどの、住民参加型調査も正式に始まりました。タンポポ調査で数千人の人が参加してくれたことも驚きでした。また、この年、有志の手で「琵琶湖博物館に期待すること」というシンポジウムが開催され、会場に入りきれないほどの人びとの関心に、学芸員一同感激しました。直接展示に必要な資料の収集はもちろん、展示のベースとなる写真の収集などもこの時代に始まりました(4)。

平成6～7年度には、最終的な運営計画を決め、そこでは、次の3つの基本理念が採用されました。

- (1) テーマをもった博物館：「湖と人間」というテーマにそって、未知の世界を研究し、成長・発展する博物館
- (2) フィールドへの誘いとなる博物館：魅力ある地域への入り口として、フィールドへの誘いの場となる博物館
- (3) 交流の場としての博物館：多くの人びとによる幅広い利活用と交流を大切にする博物館。



写真1 琵琶湖博物館上空から琵琶湖をのぞむ
(撮影 中島省三)

(3) 展示構想の展開

さて、博物館で真っ先に来館者の人がふれるのが展示です。平成2年以来、展示計画の議論を延々と重ねる中で、具体的な表現はより精緻になり「基本構想」にもり込まれたテーマをさらに拡大して、次の9点が展示の基本的な考え方として、整理されました。

(1) 「湖と人間」のよりよい共存関係をめざして、琵琶湖の地学、歴史、環境、水族を取り扱う。

(2) 地域に根ざした展示を行うとともに、広く世界をも視野に入れる。

(3) 来館者が体験、交流を通して、ともに考え、成長していく展示をめざす。

(4) 県民参加の企画展示や移動展示を開催するなど、展示をより深く、幅広いものとする。

(5) 身障者や高齢者、子ども等に配慮した展示づくりを心がける。

(6) 研究調査事業の成果を絶えず取り入れ、展示を成長させる。

(7) 琵琶湖を知り、水と親しむということを出発点とし、さまざまな要求や経験をもった人が楽しみ引きつけられる展示とする。

(8) フィールドへの誘いの場となるような展示をめざす。

(9) 地域からの情報が展示のなかにリアルタイムに反映され、また日々の活動の中から得られた来館者の声を取り入れることによって、成長・発展させる。

このそれぞれの項目は、しっかりと実現にむけられたものと、やや実現がされていないものと結果的にはわかれますが、基本的な視点はいつも上記の点にもどって議論が展開されました。

大きな展示の流れとしては、時間軸にそって太古の時代から現在までという順番に配置することが決まりました。時間軸は3つにわけ、第1の時間軸は地学的、古生物学的に迎える自然の歴史で、俗に“10の6乗の時代”と言いました。ここでは、発掘資料が豊富で、専門の学芸スタッフが内部にいる大型動物としてのゾウと、琵琶湖の固有種である魚貝類の進化がメインの柱となりました。太古の時代を五感で感じてもらえるように、200万年前のゾウのいる森のジオラマと、大型ゾウの骨格標本が計画されました。ジオラマは、その時代の雰囲気を感じられるように、中を通りぬけることができるシースルージオラマにしました。ジオラマの中に数分間いると、朝焼けから、昼、雷、夕焼け、晩の暗闇まで感じることができます(写真2)。

太古の時代展示のひとつの特色は、研究室再現です。私たちが、今、日常的に太古の時代を発見できるひとつのきっかけとして動植物の化石やゾウの足跡



写真2 ゾウのいる森

化石などがあります。とはいえその足跡や化石は研究というプロセスを経ないと意味はなかなか理解できません。河原に残された200万年前のゾウの足跡などはただの丸い穴にしか見えません。その意味を探り出すことがまさに現場のフィールドワークに根ざした研究です。化石を磨いたり、顕微鏡でのぞいてみたりという疑似研究室は問いかけや推理ができる空間をめざしました(写真3)。



写真3 自然史研究室再現

人間が琵琶湖に住み着いてから1万年あまりが“10の4乗の時代”です。それ以降、近年までの「湖と人間のかかわり」の展示は、ある意味で歴史的な物的資料が、モノ資料として価値があるゆえに、博物館的な表現が最も可能な部分でした。たとえば粟津湖底遺跡から発掘された縄文時代の人たちのくらしの一端を示すセタシジミの貝塚は、それが「5000年前の本物のセタシジミです」というだけで、感動を呼びます。かつて琵琶湖上での輸送の主役だった丸子舟を、材木の切り出しから始まり、3年がかりで実物大に



写真4 丸子舟にのる来館者と見守るインストラクター（撮影 吉村仙二郎）

復元し、歴史展示のシンボルにもしました(写真4)。この過程で、舟づくりの技術も伝承されました。琵琶湖漁業については、すでに15年近くをかけて、県が収集してきた漁具資料が実物としてあることで、湖岸、沖合い、河口部など、場所の違いによる漁具の多様性を表現することができました。この中でも、洪水のような場面はどう表現したらいいか、苦労をしたところです。明治29年には、4メートル近くまで琵琶湖の水位が上がったという場面を、来館者の動線の中で、湖面がいつのまにか来館者の頭の上になっていて、そこにゲタや飯ピツが浮いているという仕掛けで表現しました。

「大昔」といえる自然史展示、「かなり昔」といえる歴史展示のふたつの展示室をぬけて、3つめの展示室に行く途中は、琵琶湖の風景を楽しむ空間にしました。目の前のヨシ・砂浜湖岸、湖の沖合い、対岸の都市部や琵琶湖大橋、そして遠景としての比叡山や比良山という、琵琶湖のもつ多様な風景要素を一望のもとに取り入れる借景が可能となりました。私自身は、この廊下から見る夕焼け時の比叡山は、「西方浄土」のごとく最も美しいと思っています。幸い地元の漁師さんがエリを設置していて、それもいわば実物展示されています。「風景こそまず最初の展示です」という「借景」概念を初期の段階から強調することで、建物の配置や窓のとり方など、建築計画にも反映できました。

4. 環境展示の成り立ち

(1) 関係性を表現する

さて、私たちが展示の中で最も頭をいため、最後まで議論百出、ストーリーをつくれなかったのが、現在の環境にかかわる展示をどう表現するか、ということでした。本稿で与えられたテーマと直接にかかわるので、すこし丁寧にみてみましょう。

琵琶湖の環境の変化、それはとりもなおさず、日本が高度経済成長を経験した昭和30年代以降、急速に変わった近現代の「湖と人間のかかわり」をどう表現

するか、ということでもありました。“10の1乗の時代”とも言えます。そして最初に述べたように、私たちの目的は、公害問題だけでなく、生活環境問題をも表現することでした。

琵琶湖というと水質汚濁や環境破壊というイメージが強く社会化されている中で、展示として「これが良い環境、悪い環境」という言い方はできないだろうという点でまず合意ができました。社会問題化されている環境問題のバックにかくされている“関係性の構造”を表現することが必要だろうと。ただし、この構造はある意味で、自然と人間のかかわりに潜む本源的な「葛藤」でもあります。簡単に「共生」できるものでもありません。それが地域の環境問題から、地球規模の環境問題までも規定しており、まだ人類として、その解決の糸口をもっていません。石鹼問題やエビ問題は、東南アジアの熱帯雨林の問題にまでつながっています。そしてそれは人類が近代工業文明とどうつきあっていくか、という人類普遍の問題でもあります。

そもそも「環境」という概念は、主体をぬきに成立しません。「環境とは主体と周囲の事物との関係性」であると規定する時に、主体が変わったら評価は変わります。その基本概念を柱として、ドブ川の微生物を研究する人はその微生物の視点から、漁師さんの環境認識を研究する人は漁師さんの視点から環境についての表現をし、その認識の多様性を直接展示の中に表現しよう、ということになりました。でも、必ずそこには、反対意見が出るだろうと。研究者からも、地域の人たちからも、来館者からも反対意見は出るだろう。むしろ反対意見をしっかりと受けとめて、多様な考え方の中から将来を考えていくための素材ができたらいいいと考えました。来館者の意見を展示場においていってもらおう、という“情報交流型”あるいは“対話型”展示です。

(2) 個性と日常性を柱に

しかし、日常的に普通に経験していること、過去の記憶などを、個人の意見として語ってもらうのは意外とむずかしいことです。それは地元でのフィールドワークをやってきた人は経験済みです。その壁を取りのぞくための工夫が必要です。つまり“とりつくシマ”です。そのことによって“参加性(かかわり)や“対話性”が高められるだろうと仮説的に考えました。「自分に直接かかわりのある」「自分が日常的に経験した」ことからの興味です。

そこでまず環境展示の入り口には、琵琶湖周辺を含む近畿圏の航空写真を床ばりして、その上を歩けるような空間としました。「私の家」「私の学校」などを探してもらい、琵琶湖やそこに流れこむ河川や山

などとの相対的な位置関係もわかってもらえるだろうとの計画でした。結果は、文字や案内で何の指示もしなくても、床張り航空写真に張り付いて、「うちここやぁ」という声がそこかしこから聞こえてきて、人気のある展示コーナーになりました(写真5)。それ



写真5 空から見た琵琶湖

も地図ではいけません。地図は抽象的すぎて個人の生活現場と直観的につながらないからです。床張り空中写真のもうひとつの立面には、近畿圏で最初に近代水道が入った明治28年から現代まで、約百年にわたる土地利用の変化をたどりながら、琵琶湖淀川水系の水利用区域のひろがりを見られるようにしました。基礎データ収集には数年かかり、ずいぶん苦労をした展示です。社会的にも重要な情報と思っていますが、意外にも、ここでじっくりと足を止める人は多くはありません。

もうひとつの「とりつくシマ」は、過去30～40年という時間軸の中で急速に変わってきた日常生活を入り口として、その時代を生きてきた多くの人が共通に経験したであろう生活様式の変化を、生活用具の変遷や雑誌、映像などで示すことでした。多くの日本人が日常的に経験してきたモノとできごとを、「雅子さま御成婚から美智子さま御成婚」という世代をさかのぼりながらたどり、その先に、昭和30年代の農村の暮らし、とくに水利用と資源利用のありさまを、家と屋敷に引き込まれ台所代わりとされている水路などで復元しました。

このような近現代の環境変化を展示するのに個人性、日常性を取り上げた背景のひとつには、展示は来館者とともに作るもの、という考え方がありました。多くの歴史系博物館の学芸員が悩んでいることのひとつに、近現代をどう表現するか、という課題があると聞きます。歴史的に評価の定まっていない、定説のない現象をどう表現するのかという問題です。

歴史的に評価が定まっていなくても、多くの人がびとが直接経験し、人生を歩んできたのが近現代であるから、そこでの生活史、個人史を語り合わせることで、現代史のひとつのストーリーができるのではないだろうか、というのが私たちの発想でした。となると、博物館は情報の発信以上に受信が必要です。そこで、あちこちに展示に対する意見を入れていただく意見箱や、「環境絵馬」と名づけた、環境への思いを表現するコーナーなどをつくりました。

(3) 生活者と科学者

環境展示の構想をしながら、強く意識したのは、展示を見る主体の認識傾向です。当時から、私自身は「非自然科学者」として科学者と生活者の認識の違いを強く感じていました。また行政と生活の認識の違いも感じていました。行政と科学は生活の側からみると近いもの(表むきは)でした。そこで図2のよう



図2 環境認識に関する科学者と生活者の視点の違い

なかかわりを想定しました。科学的世界やそれを元に政策判断する行政の世界では、環境を見る視点は「対象中心」であり、「数え」「測り」「数量化して」「平均値を求め」「因果律を探る」ことが基本のパラダイムです。科学的因果律と行政的公平性を求める世界です。それに対して、生活世界から見る環境とは、「見る」「触れる」「味わう」という五感で表現されるものであり、「人間中心」の判断がなされます。「人間中心」というのはヒューマンスティックということではなく「自己中心」とも言えるものです。「見る主体」が科学者であるのか「生活者」であるのか、ということが展示と来館者を結ぶ仕掛けを考える時の鍵概念となるのではないかと。琵琶湖博物館の環境展示では、「生活者の眼」で導入し、その後で「科学者の眼」に展開していこうと考えました。その理由は単純で、圧倒的多数の来館者は科学者ではないからです。博物館展示の個人化(Personalization)が必要であり、後にこのことを博物館の「自分化」と呼ぶことにしました(5)。

博物館の自分化は、個人の記憶・経験(個人史)個人を取り巻く人間関係と社会のあり方(社会史)また自然のあり方(自然史)という3つの領域の接点にあるということも当時始めた地域の人たちとのホテルダス調査の中で教えてもらいました(図3)。たと



図3 博物館の自分化を左右する3要素

えばホテルひとつとってみても、ホテルとかかわる自分個人の思い出、ホテルをいっしょにとりに行った友人や近隣社会の思い出、子どもとして育った時代、そして、ホテルがくらす自然的環境、それらがすべてセットとなって私たちの生活環境をつくりだしてきたのです。先ほどの生活者と科学者の認識の違いを教えてくれたのも、地域でいっしょにさまざまな調査研究活動をしてきた仲間たちでした。

(4) 水族展示との合体

博物館展示の「基本構想」や「基本計画」では、水族館は博物館と独立施設として提案されていました。当時の関係者の多くが、水族は人気が高く継続して人を呼べるが、博物館の方はすぐにかびがはえて人は来なくなるのではないかと危惧していました。平成3年の展示実施設計の議論の時に、琵琶湖の魚たちは、あくまでも、周辺の120本以上の河川から流れこむ水や物によって影響され、湖の魚として隔離して展示することは、博物館の基本的な考えである「湖と人間」というかかわり展示に合わないのではないか、という意見が出されました。

しかし、水族は生き物であり、飼育管理上も、博物館展示と同一空間にすることは問題もあります。当時、日本国内での淡水水族館としては、技術も内容も充実していた琵琶湖文化館のメンバーと相談をし、環境展示の中に水族をふくんで、全体として環境展示とするとともに、自然史、歴史の部分は、環境とは空間的に切り放し、湿度や水分などが博物館資料に影響しないような構造としました。

このような構造が可能となったのは、展示設計が建築設計に先行した、つまりソフトがハードに先行したという条件があります。そして2階部分に、陸上

部の環境と人間のかかわりを、1階部分に、水族展示を配置し、その境目のところに、両方の部分から見える「共通展示窓」をつくる、ということでした。また水族展示では、琵琶湖の魚類の生きているありさまをできるだけリアルに表現したいということで「生態展示」をめざし、沿岸域、沖合いなどの環境を再現した中に、生き物を住まわせることにしました。ピワコオオナマズ水槽などは、背景に切り立った岩場をつくり、琵琶湖の深層部を再現しました。またどうしても、地味な淡水魚をダイナミックに表現するための「トンネル水槽」も取り入れることになりました。しかしトンネル水槽は、果たして魚が思惑通りに水槽内に分散してくれるかどうか、その展示効果なども疑わしく、担当者は随分悩んだようですが、結果的にはトンネル水槽は、大変人気が高く、琵琶湖博物館の顔となりました(写真6)。また現在、絶滅の危機



写真6 人気のトンネル水槽(撮影 吉村仙二郎)

に瀕している魚類の多くは淡水魚です。淡水魚は人間に近い領域で生活しているがゆえに、より人間の影響を受けやすい。そこで「保護増殖センター」を設置し、絶滅危惧種などを飼育、増やしながらか、来館者側からその現場を見てもらえるような展示も行うことにしました。

さらに、中国の洞庭湖、東南アジアのトンレサップ湖、アフリカのタンガニーカ湖、アメリカの五大湖などの生きた魚も大型水槽で展示され、人気の展示物となっています。そして博物館展示の最後の部分は、世界の湖の生活と生き物を比較できるコーナーとなっています。北アメリカの五大湖、南アメリカのチチカカ湖、中国の洞庭湖、ヨーロッパのレマン湖・ポーデン湖、アフリカのタンガニーカ湖へ、学芸スタッフが2、3人ずつチームを組んで資料収集や映像撮影に出かけました。この展示室では、世界中、湖沼の魚に依存する湖文化があるということが生活レベルから実感していただけるでしょう。

5. 博物館の多面的機能と運営基本計画

(1) 博物館の多面的機能

琵琶湖博物館では館の事業を5つの分野にわけました。「研究調査」「展示」「資料収集」「交流」「情報」です。しかし、これらが相互に有機的につながることが博物館にとっては重要です。特に、博物館の運営の柱が研究である、ということは琵琶湖博物館の最初からの考え方でした。しかし「博物館では研究は必須です」ということは残念ながら現在の日本の博物館ではあまり認識されていないようです。公立であるか私立であるかを問わず、「博物館の基本は展示である」と思われています。予算当局などとの交渉時にはこのことを強く意識させられます。琵琶湖博物館では、基本構想の段階から、研究調査が博物館事業の柱であるということを内外にアピールしながら、最終的には、準備室時代に皆で議論しながら、図4のよう

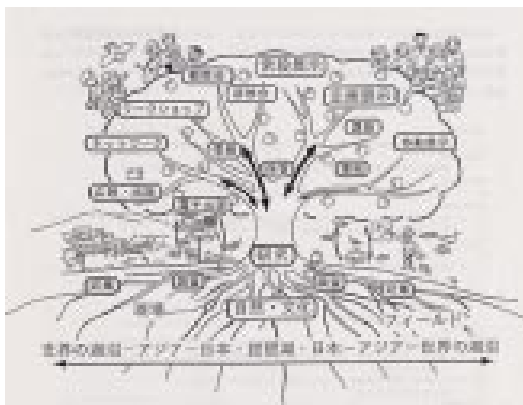


図4 博物館の運営理念を表す樹木イメージ図

な樹木図(リンゴの木)を考え出しました。そして機会があるごとに、展示や交流活動(普及をこう言い換えている)というサービス性の高い社会的活動である果実を实らせるには、大地という研究フィールドに深く根をはり、その知という栄養分を吸収し、育てないといけない、という主張をしてきました。そのような意味で、資料収集や、情報管理は柱や幹になります。そして全体として樹木が元気でないと、おいしい果実も育ちません。

(2) 博物館らしい研究とは？

琵琶湖博物館の展示はそのほとんどが内部の学芸スタッフや共同研究者のオリジナルな研究成果に基づいてつくられています。研究者のアイデアと成果を踏まえながら、研究者のひとりよがりにならない、个性的でかつとっつきやすい展示ということがねらいでした。

それと同時に、博物館らしい研究とは何なのか、という点は、自らにふりかかってくる課題でもあります。琵琶湖博物館では、自然と人間のかかわりをテーマとしているということから、いわゆる自然系、社会系、文化系という既存の学問分野をこえて、分野横断的研究が必要であると議論してきました。多様な研

究背景をもった者たちが、共通のフィールドをもって、刺激し合える場面が特定の地域を対象とした博物館の利点でもあります。もうひとつの利点は、博物館は地域の人たちと社会的距離が近く、地域の人とともに共同研究が可能です。タンポポ、カタツムリなどの生物系、また水環境カルテヤ水辺の遊びなどの生活系の環境調査が地域の人たちとともになされてきました。また博物館の運営にかかわるテーマも研究として重要です。情報システム、子ども博物館、学校教育との連携なども研究テーマとしてかかげてきました。

研究の種類としては、個人的なレベルで行う専門研究、少人数で行う共同研究、学際領域を対象とする総合研究の3種にわけています。表1には、平成10年度の総合研究、共同研究のテーマ一覧を紹介しておきます。

総合研究

博物館資料の整理・保管と利用に関する研究
水田生態系と人間活動に関する総合研究
東アジアの中の琵琶湖、その成立と人間生態系に関する総合研究
琵琶湖沿岸生態系の構造と動態に関する研究

共同研究

子ども博物館の展示と利用に関する研究
社会的要因が内湖の生物環境に与える影響
屋外展示空間の生物群集と環境の変化のモニタリング
高等学校における博物館利用の実践的研究
住民参加による気象情報の収集と分析に関する研究
生活と科学の接点としての環境調査の手法開発に関する研究
-参加型から対話型へ-
琵琶湖集水域における中世村落の考古・文献資料の総合的評価にもとづく研究
琵琶湖の生態系の長期的変遷
琵琶湖集水域における過去1万年間の自然環境と人間活動の変遷
滋賀県内における地上性歩行中(オサムシ・ゴミムシ)類の分布
カワウによる水域生態系から陸域生態系への物質移動とその影響
古琵琶湖層群の堆積環境と堆積過程 - 古琵琶湖層群下部における
デルタ成堆積物の研究 -
大分県安心院町での長鼻類化石の発掘
古代湖および海洋における魚類群構造：パターンと構造
滋賀県における陸生貝類の分布に関する研究
沿帯域モニタリングのための常設型リモートセンシングの運営に関する基礎的研究
ユーラシアにおける淡水棲貝類の生物地理に関する研究(継続)
琵琶湖とその流域の魚類に関する研究

表1 平成10年度研究テーマ一覧

また繰り返し述べてきたように、琵琶湖は世界的にも重要で貴重な「古代湖」でもあり、固有種も多くなります。また文化的な開発も古く、現在の資源的な価値も高く、世界的にも重要な湖です。そこで、国際比較研究も多いに推進する必要があります。

開館記念事業として1996年10月には、「東アジアの魚類研究」をテーマとした国際会議を、また1997年6月には、世界22カ国から50名以上の研究者を招き、行政、住民の方約300名が参加して、「世界古代湖会議」を開催しました。

これらの国際交流の流れは、現在、総合研究とし

て、東アジアにおける琵琶湖の自然史的、生態的意味を探る研究に加えて、バイカル湖やアフリカの湖沼との比較研究などとして継承されています。博物館の基本構想の中にも「世界に視野をひろげ比較の視点をもつ」という方針がうたわれていますが、私たちにとって身近な琵琶湖は、世界でも数少ない古代湖のひとつで、世界的な価値をもっています。バイカル湖、タンガニカ湖、チチカカ湖など世界の古代湖をめぐる生態や文化の基礎研究の成果を交換しながら、地球的規模からみる古代湖の保全をいかに考えるかを議論することが重要です。このようなプロセスを経る中で、目の前にあってあたり前の存在である風景としての琵琶湖の新たな意味づけが地域の人たちにも理解され、それが結果として、琵琶湖の価値を発見し、保全への精神的後盾になるだろうとも考えています。

また国際比較研究をすすめるために、1997年には外国籍の正規の学芸スタッフも採用されました。「国際湖沼学」「生物多様性学」「陸域生態系学」という3つの分野について、イギリス、アメリカ、カナダからの3名の研究者が日本人スタッフといっしょに活動しています。

(3) 交流、情報活動、資料活動

多くの博物館で「普及」といっている仕事を琵琶湖博物館では「交流」と呼んでいます。どちらかという上位から下位へ、あるいは中央から周辺へ、という「普及」というニュアンスを超えて、より双方向的なかわりをめざしているからです。博物館における交流活動は、館内での質問コーナー、フロアトーク、屋外の田畑での「田圃体験教室」、セミナー、専門講座などと合わせて、琵琶湖周辺各地に出かけての観察会などが中心となります。川那部館長も、学芸員の輪番に加わり、質問コーナーやフロアトーク役をこなしています(写真7)。また田圃体験教室は、親子で1年間にわたって継続的に米づくりを体験しながら田圃の生き物や水田文化を学ぶコースで人気が高いプログラムです(写真8)。環境と人間のかかわ



写真7 フロアトークで、アユのことを解説する川那部浩弥館長（撮影 吉村仙二郎）



写真8 田圃体験教室で脱穀に挑戦する親子（撮影 吉村仙二郎）

りを、農業や食文化から体験し、学ぶ貴重な機会でもあります。またフィールドレポーター制度では、地域からの四季おりおりの生き物、環境、生活にかかわる便りを博物館に寄せてもらい、展示などに生かしています。平成9年度は「ツバメの巣さがし」「セイタカアワダチソウ」「貝類」「使った水の量」の4つのテーマでレポートを寄せてもらい、年度末にまとめて、常設展示に展示をしました。平成10年度は県内で140名ほどがフィールドレポーターに登録し、年度初めから、タンポポやホタルの観察を行っています。環境問題についての身近な理解を深めるために、これらの交流活動はきわめて大切な役割を果たしていますが、その効果の評価方法については、現在検討中です。

また学校とのかかわりでは、これまでに約1000校、滋賀県だけでなく県外も含めて約10万人の児童生徒が、学校の公式行事として博物館を訪問し、見学、観察などを行っています。ただ、これまでは、博物館に来て学習するという学校が多かったのですが、今年度からは、地域での環境調査などを通じて学校での環境学習や郷土学習と連携するという動きが始まっています。

情報活動は、博物館の準備段階初期に、すでに基本構想をつくり、特にデータベースの企画、データ入力には多くのエネルギーをそそいできました。博物館では情報活動は、コンピューター媒体と文字媒体両方を想定しており、またビデオや静止画などの映像も重視しています。たとえば、写真については、平成10年4月段階で、5万枚ほどがCDによりデジタル化されており、そのうち2万5000枚がキャプションと撮影地点の地図とセットで検索ができるようなシステムを開発しました(写真9)。身近な環境変遷を考え、また地域の人たちに、まさに博物館への親しみと個人的つながりをもってもらう、という意味でも、写真によるデータベースは重要な要となります。また博物館周辺の人びとや組織をパソコン通信やインターネットで結び、調査研究や情報交換に生かそう



写真9 画像データベースのひとつ、水環境カルテ

という試みも準備室時代から始まり、琵琶湖周辺の気象観測網、ピワコダスも稼働しています。

資料の収集と保存は、博物館としては、欠かせない活動です。琵琶湖博物館では、収蔵庫面積を5000平方メートルあまり確保することで、長期的な資料蓄積に備えています。さまざまなコレクションの中で、古琵琶湖層産のコイ科化石4500点、琵琶湖関連漁具等6000点、植物コレクション25000点などが特色ある資料といえます(写真10)。琵琶湖関連漁具のコレク



写真10 民俗収蔵庫の一部(撮影 布谷和夫)

ションは、琵琶湖が日本だけでなく、世界的にも貴重な淡水文化を発達させてきた証として、今後の研究が大いに期待されます。

(4) 博物館の運営組織

博物館準備室時代のひとつの特色は、専門の学芸スタッフが最初から採用されていたということです。「基本構想」がつけられた平成元年に1人、「基本計画」がつけられた平成2年に5人、と毎年スタッフが増強され、開館時には、約20名の学芸スタッフがおりました(6)。

開館後の組織にもいくつかの特色がみられます。平成10年4月1日段階で、館長1、行政職12、研究職25、教育職2、嘱託16の合計55名です。

組織的特色のひとつは、行政職3名と、教育職2名は、学芸スタッフとして活動しているということです。琵琶湖の環境保全という社会的課題をも視野に入れた博物館としては、現場の行政施策や教育との結びつきをより深くしていくというねらいがあるからです。実際、研究職だけでなく、行政経験や教育現場の経験の深い人たちの知識、知恵、そして行動力は、琵琶湖博物館の運営に欠かすことのできないものとなっています。

組織上のふたつめの特色は、学芸スタッフの兼務体制にあります。研究や現場を重視し、その結果を展示や交流活動に生かすには、研究や行政現場のおもしろさ、むずかしさなどを肌で感じている学芸スタッフが展示や交流活動にできるだけ深くかかわることが重要です。そこで、学芸スタッフは研究部を本務としながら、事業部(展示科、資料科、情報センター、交流センター)や総務部(企画調整課)を兼務しています。「学」と「芸」があるのが学芸職員であって、「学」を磨くのが研究部、「芸」を磨くのが事業部や総務部の仕事で、電話の対応ひとつでも来館者対応としては大切であり、博物館に「雑用はない」ので「雑芸員はいない」と理想的には考えています。現在まで、開館後の来館者が多いこともあって、多忙な日々が続いていて、なかなか本腰を入れて研究に取り組めていないのが実状ですが、このような兼務体制が果たしてどこまで有効か、今後の内外の評価を待つこととなります。

職員の仕事やコミュニケーション環境のインフラともいえる部屋の配置も、事務職員と学芸系、嘱託職員、また展示室での来館者との交流を担当するインストラクター(派遣職員)とが、日常的に顔を合わせ、連絡調整などができるような「大部屋方式」について皆で議論をして、採用しました。学芸スタッフはそれぞれのテーマ毎に別に研究室をもちますので机がふたつあることとなります。この大部屋方式は、建物の計画段階ではかなり不安がありましたが、ともかく、忙しくてお互いの連絡もままならない状況の中では、個別の部屋のドアをたたきまわらなくても、机の上に資料やメモをおいて連絡を取ることができる、というのは最低限の効用のようです。

博物館の運営で、行政系スタッフと学芸・研究スタッフは要ですが、両者のかかわりは本来的むずかしいものです。というのは、それぞれに異なった文化的伝統の中で育ってきているからです。たとえば、「人の名前(個人名)の扱いひとつを取り上げてみて

も、両者は全く相反する文化的伝統をもっています。行政文化では、一般に書類をつくった本人の署名はしません。責任は組織にあります。個人ではなく「机が仕事を（事務系のTさんの表現）することが習慣です。そのことが行政の仕事の継続性を保証しているのです。一方、研究者は、もし論文を書いて、名前を入れなかったらそれは受け付けてもらえません。オリジナリティを重視するのが研究者の使命です。机ではなく「人」が仕事をします。「名前を入れるかどうか」というひとつの問題をとっても評価は真っ向から対立します。ですから同じ日本語をしゃべっていると、思うのが誤解の始まりで、本来、別の文化の中で育っているので、言語が通じないのはあたり前、だから、最初から翻訳して通じ合うようにしよう、という努力が必要です。これは個人の問題ではなく、組織、集団としての文化的伝統の問題で、そのことを自覚的に意識することで、立場の異なった人たちの協力が可能となります。

6. 「1枚のハンカチ」物語の裏側をのぞいてみると

さて冒頭のハンカチの話にもどさせてもらいましょう。この手紙は、実は、博物館の運営に携わる私たちにいくつか大事なことを気づかせてくれました。その点についてくわしくみてみましょう。

(1) 来館の動機、きっかけ

- 「ついでさま」「その気さま」二元論を超えて -

寺田さん親子は、子どもさんが遠足できて、見きれなかったの、後から家族で来館したということです。

「人はなぜ、どのような機会に博物館へ来るのか」あるいは「なぜ博物館へ行かないのか」という疑問は多くの博物館にとって普遍的な課題でもあります。筆者自身は国内、国外の博物館を訪問する時、できるだけタクシーに乗り、運転手さんの意見を聞くようにしています。系統だてた数字にしてはいませんが、欧米と日本の博物館の大きな違いは、日本では、日常生活の選択肢の中に「博物館へ行く」というメニューが入っていないということです。たとえば業界内部ではかなり評判の高い九州のある博物館を訪問した折、タクシーの運転手さんは「博物館？それは教養のある人が行くところだな、えっつ、休みの日に行くところ？パチンコか競艇場だ。博物館なんて行っただっておもしろくないよ」と言う。それに対して、たとえばベルギーのブリュッセルのタクシーの運転手さんは「年に2、3回は博物館へ行くよ。休みの日に子どもたちをつれて。自然史博物館の恐竜は立派だし、中央アフリカ博物館もアフリカのことが知れていい

よ」と、博物館の楽しみを語り、「あなたも日本から来たなら是非ともブリュッセルの博物館を見ていくべきだよ」と誇りをもって誘ってくれます。このふたつの例は決して特別な例を取り出したわけではありません。よく出会う事例です。

日本社会において「博物館へ行く」のは学校の遠足か、観光旅行に出た「ついで」の時、日常生活の中には博物館とのかかわりがあまり根づいていません。「博物館行き」という言葉が役に立たなくなったものの代名詞に使われるごとく、ふつうの日常生活になかなかかかわりにくいのが博物館です。そのことを強く意識しながら、たとえば平塚市立博物館の浜口哲一さんは、「遠足型博物館から放課後博物館へ」というわかりやすい表現の中で、「第三世代の博物館」のあるべき来館者像を示しました(4)。学校の遠足の時だけでなく、日常的に放課後足を運ぶことができる「参加・体験」型の博物館が、第三世代の博物館の理想です。

琵琶湖博物館では、かつて博物館準備室の顧問をしておられた三浦泰蔵氏が観光旅行や団体旅行のついでに立ち寄る「ついでさま」と、最初から博物館へ来ることを目的にしている「その気さま」という、わかりやすい表現をしてくれました。そして、「その気さま」を増やすことこそが博物館の重要な任務であると考えてきました。それは琵琶湖の環境問題をかかえ、その環境保全に対して具体的に活動する人が増えるためのきっかけとして博物館の存在価値を高めたいといういわば「存在証明」のようなものとも考えてきました。

ここで、琵琶湖博物館の来館者について、開館後1年間の来館者統計とアンケート調査から紹介しましょう。図5にあるように開館1年間の来館者(有料

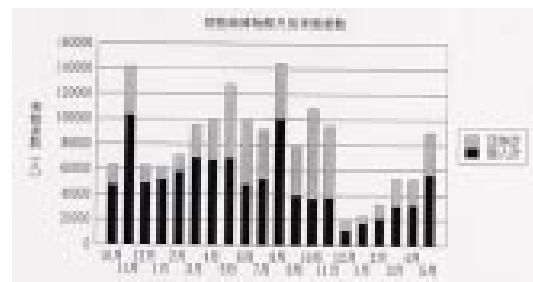


図5 来館者のうち、個人、団体比率

来館者に限る、無料の乳幼児は除く)は120万7444人で月平均約10万人ですが、個人が65%、団体が35%であり、開館2年目に入って、団体の比率は次第に上がっています。来館者の年齢は10代、20代、30代の若年層が多く、居住地では、開館後1年間は滋賀県内が約50%を占めていますが、次第に県内比率は減少し、県外比率(大阪・京都・名古屋圏など)が増えていま

す。滋賀県の総人口が130万人しかないということを考えると今後の県内来館者はリピーターを増やすという方向が主とならざるをえないでしょう。

さて、博物館への来館のきっかけをどこ(だれ)から得たかという問題ですが、アンケート調査によると「友人・知人」「家族」など身近な人からの「口コミ」によるものが増えてきています。またマスコミ系では「テレビ」と「行政広報」「新聞」です。この調査の中で「その他」のところには、「団体で来たがおもしろかったので家族を連れて来た」あるいは逆に「家族で来てよかったから自分が役員をする子ども会を連れて来た」というような記述が目立ちました。同じ調査で博物館への来館回数も尋ねていますが、開館1年後のリピーター割合は約25%であり、2回以上7回までという人がいました。2回以上のところには、上のように、家族、地域団体、職場団体などさまざまな機会をとらえて来ることがリピーターにつながっています。

さて、冒頭のハンカチ物語の寺田さん家族も遠足から家族へ、というパターンです。具体的な個人や家族の行動に想像をめぐらして初めて、私自身は、「ついでさま」「その気さま」と分類して考えていた自分自身の思考の中に落とし穴を見る思いがしました。人は人をどうしても特定の属性で見て、それで当てはめて安心してしまう傾向にあります。でも「本来、人は複合的な意識、多面的な社会関係」をもっているのです。少し思いかえしてみたらあたり前のことです。特に日本社会は団体旅行、団体行動が多いという特色があります。日本人の団体好きは、社会的にはいろいろ揶揄されてはいますが、言うまでもなく、団体を構成するのは個人です。たとえば、人は日常的にカジュアルな服、正装、和式、洋式、さまざまな服を脱ぎ替えるように、社会的文脈によって、さまざまな役割を演じています。個人で来た人はその人のかかわる団体の行き先として博物館を取り上げ、逆に団体で来た人たちの中から次に、個人的つきあいの人たちを連れて来る、という転換が日常的に起きています。「遠足型」は「放課後型」に転換しうるし、「ついでさま」は「その気さま」に転換しうる。そして要となる個人が、社会関係をつむいでいく。その関係性の中に博物館への来館や、さらに博物館での交流活動への参加などを位置づけてもらうことで、「博物館自身が社会生活に参加していく」ことになるのではないだろうか。来館者の日常の社会的関係を視野に入れた形での、博物館自身の社会活動への参加が次に考えるべきテーマとなるのではないかと今考えています。

その時に大事なのが、それぞれの個人が、何をどう

自分の周囲の人、他者に伝えたか、つまり琵琶湖博物館はどういうところとして認識し、語ったかというイメージです。博物館の準備段階で、博物館では何を伝達するのかという基本的理念、またそれは展示や映像などでどのような表現として来館者に提示されるべきか、そこに多くの博物館関係者のエネルギーがそそがれてきました。

しかし、一端、来館者の前に提示されると、ある意味でそれをどう解釈しようと来館者の自主的な(あるいはいけば勝手に)解釈に任されることとなります。琵琶湖博物館が開館して1年半、私たちは、いかに展示企画者と来館者との間には、コミュニケーションが成り立ちにくいものか、あるいはいかに来館者は「自由に」誤解するものであるか、ということを知りつつあります(7)。そしてある意味で誤解も、勝手に解釈もその内実を知るのは、たいへん楽しいものです。来館者へのアンケート、追跡調査などをふくめて、どのような方法で来館者行動をより深く知り、次の企画につないでいけるのか、これからの重要な運営テーマでもあります。

(2) 琵琶湖博物館のイメージ

では、具体的に寺田早百合ちゃんは、博物館をどう語ったのか、再び、寺田さんの手紙にもどりましょう。寺田早百合ちゃんの語りは多分何度か家族の中で繰り返されながら、博物館へ行こうという行動を起こす引き金にもなっていたのでしょうか。お母さんは、早百合ちゃんの語り表現らしきものを手紙の中で『』で示してくれています。まず最初は、『遠足の時は急いでいたので、あまり遊べなかったディスカバリールーム』です。

琵琶湖博物館のディスカバリールームの設置経緯は、学芸員の芦谷美奈子が『博物館のあゆみ』の中で詳しくまとめているので、興味をおもちの方はそちらを参照していただきたい。この部屋は、常設展示が有料空間で小学生以上を対象としているのに対して、未就学児を対象に、入り口部分の無料空間にあり、情報センターなどと同じように繰り返し利用してほしい場として設置しました。さわって、体験できるアメリカの子ども博物館のハンズオンの精神を反映した部屋ですが、利用者は小学生やカップルなど、最初に想定した年齢よりも年上の人が多いようです。特にこの中でも人気の展示は、「ザリガニになろう」という、人間が中に入ってザリガニになったつもりでエサとりができる大型模型です(写真11)。「自分とは異なる存在になったつもり……」という「他者体験」はディスカバリールームでの初期のねらいでもありました。この発案は、準備室時代のワイワイガヤガヤ議論の中から出てきたものです。他者体験というのは



写真11 「ザリガニになろう」に群がる小学生たち
(撮影 吉村仙二郎)

おおげさに言うと、現在の生活環境型環境問題につながるテーマであるとも考えています。

また『プランクトンが空中に現われるが、手でとろうとしてもとれない』展示は、「ミクロの世界」と名づけており、琵琶湖の水中の目に見えないプランクトンの世界を、拡大動画で写し、それを三次元空間の中に「デルビジョン」という手法を使ってはめこんだものです。基本アイデアから映像撮影まで、プランクトン専門の楠岡泰主任学芸員が手がけたものです。目の前にある琵琶湖の水中世界を覗いてみる見方として、生きた魚貝類を展示する水族展示と並んで重要な水中表現手法でもあります。

またそもそも寺田さんがハンカチを忘れた洗濯機というのは、昭和39年の琵琶湖周辺の農村での水利用のありさまを家(富江家)と庭、川など丸ごと再現をしたコーナーにおかれていた昭和30年代の、手まわし絞り器がついた洗濯機のことです。それを見てさわったり、実演してみたり自由にできるようなしつらえになっています(写真12)。琵琶湖周辺では、昭



写真12 昭和30年代の洗濯機体験

和30年代まで、湖水や川水などは浄化せずに飲み水にしていた地域もあり、その時代の水との深いかわりを思い起こし、今との違いを来館者に自覚してもらいたいという意味の展示でもあります。そこには、来館者の感想文を書き込むノートがおいてあり、それが現在30冊目になっています。そこにかかれた絵や文章を読むのは学芸員としては大変楽しいこと

ですが、その深い分析は今後の課題です。感想を書き込むのは圧倒的に若い人、子どもたちが多いが、子どもたちにとっては、完全に異文化体験、どこか知らない遠い世界であると認識されています。しかしこの展示の本来のねらいでもある「水利用の苦勞」「水や物質循環をめぐる巧みな生活の知恵」を書いている人はきわめて少ない。これは、展示をめぐるミスコミュニケーションでもあります。

とはいえこれまでに、富江家のトイレ展示で、実際に用便をした事例が2回ありました。いずれも高齢の方ですが、再現展示をした学芸員冥利につきて、と喜んでいるものの、排便という行為のもつ身体性、個人性、習慣性を考えると、これはこわいことでもあります。博物館は「見る」ための装置としての人為空間から、人を行動にかりたてるための「イデオロギー空間」にもなりかねないことを示唆しているからです。そして、私たちがこれまで折にふれて表現してきた「博物館は本当のフィールドへの入り口にすぎない」という時、本当の現場での人びとの生活や自然と博物館での経験がどう切り結ぶことができるのか、という次の重たい課題が待ちかまえているからです(8)。

(3) 博物館運営のための支援：

コミュニケーションスタッフ

さて、最後にまた寺田さんの手紙にもどりましょう。早百合ちゃんは、プランクトンの場所がわからなくて、「博物館のお姉さん」に案内してもらったという。この博物館のお姉さんは、インストラクターと呼んでいる博物館の来館者の方との対応をするコミュニケーションスタッフで、男女合わせて60才までの方、30名が交代で勤務しています。館内に入った時の観覧券の販売から、各展示室での対応など、できるだけ直接に人に対応できるようにというのが琵琶湖博物館の最初からの方針でした。とはいえ、行政改革の折、県職員ですべてというわけにはいかず、委託派遣となりました。コミュニケーションスタッフは学習意欲も高く、展示内容については、各学芸員が、日替わりでレクチャーをし、全員すべての部分をまわるので、学芸員よりも全体をよく知っていたりします。実は、早百合ちゃんのハンカチを拾い、それを保管し、返送したのも、このコミュニケーションスタッフの仕事がスムーズにしているという証拠です。

また博物館では、レストラン、ショップというサービス施設も大変重要なところ。来館者の楽しみをもし数字であらわすことができるとしたら、2~3割はレストランとショップかもしれない。琵琶湖博物館では、テナントでそれぞれに店が入っています。景色のよいレストランは、人気のスポットでも

あるようです。

そして博物館にどのようにアプローチするか、それも大事な博物館体験です。寺田さん親子は、船で浜大津から琵琶湖上を渡って来て、楽しんだようです。湖辺にある博物館ならではの楽しみ方と言えるでしょう。琵琶湖を丸ごと、まさに現場で体験してもらうためにも私たちは「船でおこしください」と広報し、船の利用をすすめています。現在までのところ、来館者の5%ほどが船で来館しているようです。

7. 博物館と地域社会： 地域課題にこたえる博物館

参加と交流を柱とする「第三世代の博物館」の提案をした伊藤寿朗氏は、理想の第三世代博物館はまだない、と言っていました(9)。琵琶湖博物館は、ある意味で、伊藤氏のいう第三世代をめざして活動してきましたが、しかし今やそれ以上の課題があるようです。それは「地域課題にこたえる」という使命をおび始めていることにあります。エコミュージアムが「地域づくり」「町づくり」と緊密に連携しながら、動いているのと似通っており、琵琶湖については、単に「社会教育、生涯学習、文化活動の拠点」ではすまなくなっています。

折しも1997年には、25年間にわたった琵琶湖総合開発が終了しました。その間に、琵琶湖周辺の環境はいかに大きく変わったか、それは水質というような数字以上に、風景や生き物の顔ぶれ、生活の仕方などにあらわれています。平成9年秋に行った琵琶湖博物館の企画展示では、昭和30年代と現代の写真を比較した「私とあなたの琵琶湖アルバム」を開催しました。そこに寄せられた感想の中で最も多かったのが「こんなに大きく風景が変わったことを改めて実感した」というものでした。そして今、大きく変えてしまった琵琶湖について、住民、行政、両方の立場から反省の声も聞かれ始めています。生態系の復元や、文化の伝承、新しい湖と人間のかかわりが議論され始めています。

そのような時代背景の中で、琵琶湖博物館はどう動いていったらいいのでしょうか。1996年10月の開館記念のあいさつで、川那部浩哉館長は、「これまで、<準備室なれど博物館>という精神でやってきたが、これから<博物館なれど準備室>という精神で、成長しつづけたい」と結びました。「博物館なれど準備室」の精神を実現するべく、開館10年後を目途に、琵琶湖博物館の将来を考えるワークショップと委員会が今年度から発足します。そこで「セカンドステージの琵琶湖博物館」の基本理念や、運営、資料、展示、交流、情報活動などがいかにあるべきかを議論

していくこととなります。

大きな風呂敷をひろげすぎて、戦線を縮小すべきところ、これまで想像だにできず、全く見落としてしまった運営のこと、などさまざまなテーマがあります。すでにあるものを壊してから描くのは、白紙のキャンバスに絵を描くよりも困難です。それをどう乗り越えて、セカンドステージを拓いていくのか、第2世代の課題です。

「Think globally act locally」という言葉があります。「地球規模で考え、地域で行動しよう」という意味ですが、1980年代、地球環境問題が社会問題化される中で、ひろまった言葉です。「地域」という狭いわくの中で物事を考えるのではなく、「地球規模」でまず考え、それを地域で実践しようというスローガンでもあります。しかし、オリジナルな発想は、地域の現場から生まれるといわれるように、私たちにあって、地球の問題はどうしても他者からの受け売りになりがちです。もし、真に地球環境の保全を願うなら、それは、個別の地域環境の保全という課題をそれぞれのローカルな地域で果たし、その結果として、地球環境は保全されるものだろうと思われまます。「Think Locally Act Globally」が、本稿に与えられた課題への私なりの回答です(10)。

<文献と注>

- (1) 生活現場の環境問題については近年さまざまな研究がすすみつつありますが、琵琶湖に関しては、鳥越・嘉田編『水と人の環境史』(御茶の水書房、1984年)、嘉田由紀子『生活世界の環境学』(農山漁村文化協会、1995年)などがあります。
- (2) エコミュージアムについては、1995年に研究会も発足し、大変活発な活動が各地で始まっています。さまざまな報告がありますが、入門書としては、新井重三氏のものの方がわかりやすい書です。新井重三編著『実践エコミュージアム入門』(牧野出版、1995年)。
- (3) 嘉田由紀子・大西行雄「湖沼環境保全と地域社会」『滋賀県琵琶湖研究所所報』3号:73-83頁、1985。嘉田由紀子・大西行雄「琵琶湖の環境保全と<総合地域博物館>」『滋賀県琵琶湖研究所所報』4号:88-98頁、1986。
- (4) 博物館準備室時代から開館までの記録は、琵琶湖博物館編(高橋啓一担当)『琵琶湖博物館、開館までのあゆみ』(琵琶湖博物館発行、1997年)を参考にしてください。
- (5) 博物館の自分化という表現は、「ミュゼ」編集長の山下治子さんのご指摘によります。
- (6) 博物館計画の初期の時代から専門の学芸スタッフを採用することは一般には大変むずかしいことといわれています。琵琶湖博物館の場合、平成元年に最初の学芸員を採用するために、幹部職員のTさんが教育長室に座わり込んだということがあったようです。最近になって知らされた秘話でした。
- (7) 博物館における来館者行動、あるいは展示を介しての企画者と来館者のコミュニケーションというテーマは、博物館の企画、運営にとってはきわめて重要な問題と思われまますが、日本での問題意識は大変弱く、ようやく先駆的な試みが始まるようとしている段階です。問題提起の論文としては下記の2編があります。篠原徹「不思議な場としての博物館」『民俗展示の構造化に関する総合研究』(国立歴史民俗博物館研究報告)1988:25-33頁。橋本裕之

「物質文化の劇場—博物館におけるインタラクティブ・ミスコミュニケーション—」『民族学研究』62-4:537-562頁、1998年。アメリカ、フランスでは来館者との相互作用や来館者行動調査は博物館学における重要なジャンルを形成しています。アメリカでのひとつの典型的な例が下記です。フォーク・J.H.、ディアーキング・R.D (高橋順一訳)『博物館体験:学芸員のための視点』雄山閣出版、1996年。

(8) 地域社会や政治イデオロギーと博物館とのかかわりについては、現在アメリカでは急速に研究がすすみつつあります。下記のような書が参考となります。Karp, Ivan et al (ed), *Museums and Communities*, Smithsonian Institution Press, 1992。Kaplan, Flora (ed), *Museums and the Making of "Ourselves"*, Leicester University Press, 1994。

(9) 「第三世代の博物館」については、以下の文献を参照しました。布谷知夫『日本の博物館の歴史』博物館ができるまで『琵琶湖博物館企画展示図録、13-16頁、1997年。伊藤寿朗『市民のなかの博物館』吉川弘文館、1993年。

(10) 本稿の一部は、1998年5月23・24日、琵琶湖博物館で開催された日本展示学会で発表し、その場での展示学会関係の皆さまとの議論は本稿をまとめる上で大変参考になりました。また昭和60年以降の博物館建設にかかわる記述は、博物館職員はもちろん、実に多くの皆さまとの議論、交流、そして実践的活動が柱になっています。このような原稿は、それらの人たちすべての連名で書くべきものかもしれませんが、それも実際には不可能なので、今回は思いきって関係者の代弁として、このような紹介をさせてもらいました。とはいえ、記述の立場、あるいは内容の責任は、琵琶湖博物館ではなく、あくまでも筆者個人の責に帰するものです。